

放射線リスクコミュニケーション 相談員支援センターだより

花を育て、町を育てる

あぶくまカットフラワーグループ

廣野 晶彦 様



廣野 晶彦 様（トルコキキョウの苗床の前にて）

「あぶくまカットフラワーグループ」は川俣町山木屋地区でトルコキキョウ（トルコギキョウ）を中心に切り花などを生産する花卉（かき）農家のグループです。震災後は町内でいち早く営農再開に取り組みられました。本号ではグループ員であり花卉農家として活動されている廣野晶彦様に現地でお話を伺いました。

—廣野さんは様々な農作物を生産されていますが、「あぶくまカットフラワーグループ」内で生産しているトルコキキョウが代表的です。川俣町産のトルコキキョウの特色を教えてください。

川俣町山木屋地区は標高が高く、夏場でも涼しく花の成長に適しているため、品質が良いのが特徴です。「あぶくまトルコキキョウ」として主に関東方面へ出荷し、一定の評価を得ていて、ブランド化も進んでいます。トルコキキョウは全国で生産されていますが、私たちは栽培管理で出荷時期を調整し、市場のニーズに合わせて供給できることが強みです。

—「あぶくまカットフラワーグループ」は震災後も速やかに営農を再開されています。

当時はちょうど植え付け準備の時期でしたが、その後避難指示によって再開の見通しもなく、せっかく築いたブランドが消えてしまうのではないかと不安でした。でも「忘れられないうちにもう一度作ろう」という強い思いがグループにありました。

—震災当時、廣野さんは東京の花卉市場で働いていましたが、川俣町へ戻ることに迷いはありませんでしたか。

花は食べ物と比べて風評被害が少なく、むしろ生産を応援してくださる方が多いように感じました。だから「良いものを作れば大丈夫だ」と思いましたし、再開の話聞いて山木屋に戻る決心がつきました。

—移住・定住推進委員も務めています。きっかけを教えてください。

人口減少が進む中で、町がどのような取組をしているのか知りたかったことがきっかけです。帰還後、自分が生活する中で「ここは改善できるな」と思う点も増えてきて、地域の取組に意見を届けられる立場になりたいと思いました。交通の利便性などに解決できない課題もありますが、例えば雪道の注意喚起など、外から来る人に向けた細やかな配慮を示すだけでも「歓迎されている」と感じてもらえるはず。移住者を増やすには、川俣町を移住先に選んでもらえる理由をしっかりと示すことが大事だと思っています。

—移住や定住の相談を受けることが多いと思いますが、放射線への不安を口にする人はいますか。

震災直後に比べるとほとんどいません。ここが以前、避難区域だったことを知らない人も多いくらいです。観光農園にもたくさんの方が来ているように、町を訪れる人で放射線を気にする人は少ない印象です。

—地域おこし協力隊の受け入れも続けています。隊員は栽培の知識や技術を習得して山木屋地区で新規就農を目標に活動されていますが、廣野さんは隊員にどのような役割や成長を期待していますか。

農家の高齢化が進んでいて、このままだと規模が縮小してしまいます。だから新しい人に入ってほしい思いがあります。隊員の皆さんには座学だけでなく一緒に作業しながら3年間で基礎を身につけてもらいます。ただ、天候も毎年違うため3年では足りないくらいです。10年くらいでようやく出荷量を自分でコントロールできるようになると思

います。協力隊を終えた後も収支がプラスになり継続した営農ができるように見守っていきたいです。

——最後に川俣町は移住を考えている人にとってどのような環境ですか？暮らしについて教えてください。

「程よい田舎」を感じられる町です。生活に必要な店は揃っていて不便はありませんし、都市部のような混雑もないのでのびのびと生活ができます。山木屋地区は震災後に外部との交流が多かったこともあって、移住者を受け入れる雰囲気もあります。

——帰りにハウス内でトルコキキョウの苗床を見させていただきました。まだ小さなトルコキキョウの苗が土の温もりに守られながら力を蓄えるその姿に、町が未来に向けて一步を踏み出す準備を垣間見ました。川俣町の人々の手と想いが、この苗と同じように未来を育てていくことを実感しました。

にとってTVや新聞等のメディアだけでは知ることのできない現実を学ぶ機会となりました。



情報提供の様子

続いて、高村昇先生（長崎大学）を講師に迎え、「放射線被ばくとリスクコミュニケーション」に関する講義が行われました。放射線の健康影響について科学的な知見をもとに解説するとともに、長崎大学が取り組んでいる福島復興支援事業に関する説明等が行われました。高村先生からの「放射線被ばくと健康影響について正しく知り、「正しく怖がる」姿勢を持つこと、そして放射線について正しく伝えることを学んで欲しい。」というメッセージに、生徒たちは真剣に耳を傾けていました。

さらに、ゲルマニウム半導体検出器による放射性物質測定の見学では、測定方法や土壌の測定結果についての説明を受けました。これまでの活動で学んだ放射線の知識を踏まえながら、測定結果で示された数値が何を表しているのかを熱心に理解しようとする様子が伺えました。

車座意見交換会の例

福島県立安積黎明高等学校



令和8年1月31日、福島県立安積黎明高等学校の生徒18名が、震災時に全村避難を経験した川内村を訪問し、車座意見交換会を実施しました。同校では年間を通じて探究活動を行っており、令和7年度の放射線リスクセンターによる支援は今回で5回目となります。これまで放射線教育や施設見学等を重ねてきた生徒たちが、1年間の学びの集大成と位置付けた活動となりました。

同校では福島の復興をテーマとした探究活動を進めており、放射線の基礎学習から施設見学、意見交換と学びを深めてきました。前号で紹介した車座意見交換会（令和7年12月13日実施）では、中間貯蔵施設や震災遺構浪江町立請戸小学校の見学を通じて復興の現状を学びましたが、今回の活動は、それらの経験を踏まえ、さらに理解を深める機会として実施されたものです。生徒たちは福島の復興を自分たちの課題として主体的に考えながら活動を進めています。

これまでの活動では、放射線の基礎に関する講義や放射線の測定実習等の事前学習を行ったほか、第一原発や中間貯蔵施設等の見学、意見交換等を実施し、福島の復興の現状について多角的に学ぶことができました。現地を訪れ、実際に見て学ぶ経験を積み重ねることで、生徒たちは徐々に知見を増やし、自分の考えを持つようになってきています。

当日はまず、井出寿一さん（一般社団法人かわうちラボ）から、第一原発事故当時の避難対応や復興の取組に関する情報提供が行われました。行政の現場に関わった方から語られる具体的な経験談を通して、生徒



意見交換の様子

その後の意見交換では、福島の復興に強い思いを持ち、生徒とともに探究活動に熱心に取り組んでいる同校の熊田宏毅教諭がファシリテーターを務め、生徒の意見を引き出しながら議論を進めました。生徒たちは、「これまで学んできたことを受けて感じたことや、自分たちの決意」をテーマに、この1年間の活動を振り返りながら活発な議論を行いました。参加した生徒

からは、「参加する度に新しいことを知れて、福島県のために活動している方々に出会えることが本当に楽しい。」「このような環境の中で学ぶことができ良かった。」といった感想が聞かれました。また、「今まで、震災やその後の問題をこれまでどこか他人事として捉えていた。また、知識もないため、真剣に考える機会もなかった。しかし、今回参加したことで自分の問題として向き合っていきたいと思うようになった。」という声もあり、継続的な学びが意識の変化に繋がっている様子が伺えました。

継続的な学びの積み重ねの中で、生徒たちは多様な視点から物事を捉え、自ら考え行動する力を着実に身に付けています。放射線リスクミセンターでは、今後もこのような活動を通じて、福島の現状を主体的に学び、未来を考える若い世代の探究活動を支援していきます。

研修会の例

飯舘村社会福祉協議会



飯舘村社会福祉協議会では、社会福祉・高齢者福祉をはじめとした社会福祉活動の充実に努めるため、様々な事業を実施しています。そのひとつに、放射線相談支援事業があり、放射線支援相談員（以下、相談員）が帰村した住民、ならびに避難先住民の自立に向けた見守り・訪問活動等を継続しており、その中で放射線に関する相談活動を行っています。

第一原発事故から14年が経過し、長泥地区の一部の避難指示がようやく解除され、インフラの整備等が進みつつも、村民生活の再生へは道半ばという状況です。

放射線相談支援事業の継続にあたり、令和5年度から相談員を対象とした放射線に関する研修会を実施しています。相談員の皆さんは、個別訪問を通じて住民と対面で話すことも多く、その際に放射線に関する正確な知識を持つことが大切だと考えています。そして、定期的に研修会を行うことにより、放射線に関する理解度も深まり、普段の業務にも活かせることから、今年度も同様に実施し、6名の社協職員が参加しました。

令和8年1月26日、飯舘村社会福祉協議会内ボランティア室にて、講師に佐藤久志先生（福島県立医科大学）を迎え、「食品と放射能の切っても切れない縁」と題し、食品による内部被ばくについての基礎知識を中心に、放射線による健康影響、福島の原子力災害等についての講話を聞きました。

「食と放射能」については、飯舘村社協職員が日頃より興味関心が高く、多くの相談員がさらに知見を得られるようにとの要望が実現したものです。普段の生

活ではあまり目にしない単位（Bq：ベクレル）の説明から始まり、1 Bq経口摂取した場合、どのくらい被ばくするのか、といった食品からの被ばく線量について詳しい話があり、相談業務に役立つ内容が盛り込まれました。



研修会の様子

放射線の健康影響については、第一原発事故当時に、佐藤先生自身が勤務地において計測した空間線量率や飛散した放射性物質等のデータをもとに、改めてしっかりと時間をかけて解説を聞く時間となりました。事故当時、また、その後も溢れている情報を整理することで、相談員は住民対応において活かせる知識の定着を図ることができたと思います。

研修会中の質問では、「飯舘村産の原木でできたキノコは食べられるのか。」「飯舘村の山の木を住宅の木材に使った場合、放射線による影響はあるか。」等の、日々の生活に密着した疑問や、「放射線が人体に与える影響とはどのようなものか。」といった、放射線の基礎知識に関連し、専門家に聞く機会を逸している疑問について、専門家からの詳しい回答を得ることで認識が高まったようです。

研修会のまとめとして、福島の放射線災害では、汚染された食品の検査や流通のコントロールが厳しく行われ、健康影響の出るような内部被ばくは受けていないこと、一方で厳しい制限規則のために生産者は大変な管理努力と出荷できないことによって、大きなストレスがかかったことについても話がありました。



研修会の様子

